



火の柱

Friends of Jesus 2020.12

イエスの友五綱領

- ①イエスにありて敬虔なること
- ②貧しき者の友となりて労働を愛すること
- ③世界平和のため努力すること
- ④純潔なる生活を尊ぶこと
- ⑤社会奉仕を旨とすること

イエスの友会は、上の五綱領を、生き方の基盤としているキリスト者と賛同者の群です。(結成1921年10月5日)

テーマ「イエスの友会百周年を間近にして」・・・「イエスの友会を支えた花盛勲一先生」鈴木武仁、「私の救い」黒川知文、
「神の恵みに生かされて」米田昭三郎、「共に歩んだ喜び」長谷川進一郎

イエスの友会を支えた 花盛勲一先生

イエスの友会会長

鈴木 武仁



花盛勲一師

花盛勲一先生のご伴侶音羽姉が、世田谷区祖師谷を離れて次女夫婦の住まわれる八ヶ岳の山塊

が見られる長野県諏訪の地に移住された通知をいただき、若き日にポリビア宣教にご夫婦で移住されたことがあったのを思い出しました。花盛先生はその後イエスの友会、事務局局長を長らく務め、組織づくりに奮闘され、最後には委員長(現在の会長職)としてご活躍されました。来年はイエスの友会創設百周年を迎えるのですが、わたしにとって花盛先生はじめ金子益雄先生、長谷川保先生、財務委員長をなさっておられた加藤亮一先生、イエスの友会のロゴマークを作製された横山麗子姉、吉村静江姉、兵藤みや子姉、工藤三代松・三郎兄弟など忘れられない方々で一杯です。名前を挙げればきりがないほど多くの同志によって支えられてきたイエスの友会であるが、詳しくは別の機会にいたします。

さて花盛勲一先生がイエスの友会と深い繋がりを持つようになったのは何であつたか、と言うと武藤富男先生との繋がりでした。昭和三四年頃、日本聖書神学校の神学生だった先生

はキリスト新聞社副社長武藤富男の下でそこにあったラクーア伝道事務局でアルバイトをしていたことに始まります。社長は賀川豊彦先生であり月に一回くらい監督にいられていたもので、遠くから眺めることができた。一九六〇年、神学校を卒業すると「開拓伝道は男の本懐」と励まされて、賀川先生の弟子たちが設立した「祖師谷伝道所」に赴任し、その帰りがけに松沢教会の中にあつた賀川先生のお宅に挨拶に行つた。賀川先生は既に病んでおり、話もできず、黙って握手をされましたが、その年に召されました。よって花盛先生の賀川豊彦観は賀川著作集や約六年間指導を受けた武藤富男先生からの受け売りの様でありました。そんな中でこんなことを知つたそうです。戦後、初めて口語訳の新約聖書が武藤先生の努力で出来上がり、キリスト新聞社から発売され、多くの賞賛を得たことがあつたのです。しかし、あるアメリカ人宣教師が、それをまとめ買いをした時、代金を何時までに入金できますかと武藤先生が尋ねたところ、宣教師は「聖書に誓うなどあるので私は約束できません」と言つたのだそうです。

武藤先生は、元裁判官、判事なのでこのことを賀川先生に報告し、この宣教師を裁判所に告訴して、日本におられないようにしましょう、と申し出ました。これを聞いた賀川先生は、その場に膝まづいて、「武藤さん、それだけはやめてください。お金はわたしが払いますから」と言われたのでありました。賀川先生は、十字架愛、贖罪愛の実践を地で行く人だと武藤先生か

ら何遍も聞いたエピソードでした。エフェソ三章十八節に「また、あなたがたがすべての聖なる者たちとともに、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに越えるこの愛を知るようになり、それによって満たされるように」とありますように、賀川先生もキリストのように、心の広い寛大な人であつたのだと思つたそうです。武藤富男先生が満州国の広報処長時代、賀川先生が日本から伝道にいられた時、朝四時頃、部屋を覗くと、賀川先生は正座して、熱心に祈つておられていたそうで、やっぱり賀川先生は、聖者だと思つたそうです。

またこんなエピソードもありました。賀川先生の事務所、会計係をしていたSさんが、金を持ち逃げしてしまつたことがあつた。しかし、一年後に詫言を入れて帰ってきました。しかも、このことが三回を超えても、賀川先生は何度でも赦し、ついにこのSさんは心から悔いて、立ち直つたそうです。聖書にある七倍の七〇倍の赦しの実行者でもあつたのでした。

花盛先生はじめイエスの友の先輩たちから、このようなエピソードをお聞きし、賀川豊彦先生の贖罪愛の神学の実践とはどのようなものかを学べたことは感謝でした。わたしにとってイエスの友会は聖書の学びの学校そのものであつたのです。

このようにイエスの友会は、先輩後輩の同志愛、師弟愛をとおして主の愛がいかなるものかを受け継いできているのであります。

私の救い

賀川豊彦記念松沢資料館館長

黒川 知文

内海教会



私は一九五四年十一月十二日に瀬戸内海に浮かぶ小豆島に生まれ

た。父は香

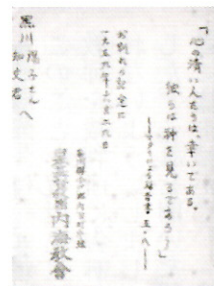
川県庁土木課の職員で、小豆島の内海土木出張所に勤務していた。土木出張所に隣接する二階建ての木造官舎に妻と二歳上の姉と居住していた。近くには日本基督教団内海教会があった。私の家はクリスチャンホームではなく無神論の家庭であつたので、小豆島だから名産のソーメンをかけて「アーメン、ソーメン、冷ソーメン！」と言って、友人と教会をからかっていた。また教会の庭で落とし穴を作って遊んでいた。姉は両親が私の育児に忙しく寂しいためか、内海教会の日曜学校に出席して皆勤賞をとった。「教会に行くと友達がいって、お菓子もくれたのでよく行った」とのこと。

私は日曜学校に行かなかったが、ただ一度だけクリスマスの日に姉に連れられて教会に入った。玄関すぐの部屋には女の子たちで一杯であつた。彼らが歌っていた「主は来ませり」は、長い間「シユワツキマセリ」の呪文の言葉だと信じていた。男の子は自分一人で恥ずかしいので出ようとして、ふと隣の部屋を垣間見た。礼拝堂があつた。誰もいないが、そこは他とは違う所、「聖なる空間」。以後、心の隅には「教会は聖なる空間」という印象が残っていた。

内海教会は一九四七年二月二三日の賀川豊彦による聖日礼拝により発足し、一九五一年三月からは金子益雄が牧師として赴任したが、兼任のために説教は数名の信者も行っていた。当時の礼拝出席者は十名足らずだから牧師の収入も少なかった。(『創立四十周年記念誌』日本基督教団内海教会、一九八七年)。「牧師家庭にお風呂に入ってもらった」、「金子益雄牧師は人格者だった」と母が言っていた。礼拝堂には賀川豊彦筆による掛け軸が今もある。「神はその御子を賜ふほどに世を愛し給へる」ヨハネ福音書三章十六節

父が長尾町土木出張所に転勤となり一九五九年六月三十日に小豆島を

去った。その一日前に、内海教会から新約聖書を別れの記念にもらった。表紙裏には「心の清い人たちは幸いである。彼らは神を見るであろう」と記されていた。この聖書は私の本棚にずっとあり、高校生までに何度



か読もうとしたが、マタイ福音書の第一章のイエスの家系につまずき、「何とおもしろくない本か」と思い、それ以上読むことはなかった。

一九五九年六月二九日、連絡船ひとみ丸に乗船して小豆島を後にした。

「一般恩寵」の時代

私の小中学校時代は、西洋史にたとえると「古代文明が栄えた時代」であつた。古代ギリシャ、ローマ文明のよう創造主なる神を知らなくても繁栄した時代。神学的には「一般恩寵」の時代であつた。優等生で模範生。特に三木中学校時代では、成績はほとんどトップで生徒会長で陸上部の部長。フアンクラブもあり、青春を語り合う親



友も何人かいて、「カルピスからウオッカ」の初恋も経験した。世界は自分を中心にして動いていると、本当に信じていた。それが、高校に入ると暗黒の中世になるのであつた。

香川県では「東大に入るよりも難しい」と言われる県随一の進学高である高松高校に入学し、これで人生の目標は実現したと思つた。だがそうではなかった。厳しい現実が待っていた。

優等生からの転落

何よりも成績が大きく変わった。通知簿には四とか三とか、信じられない数字が、しかも複数記されていた。学年の成績順位も百番を超えていた。

「どうしてこんなことが？」オール五も学年一位もとれない劣等生。人生における初めての挫折。自分がはじめに思えた。それまでは自分を中心として世界が動いていた。それが、自分は世界の中心ではなく、世界の動きから降り落とされようとしている。今になって考えると学年一位をとれないのは当然のこと。県下二百弱の中学校のトップレベルの生徒が入学したのだから、成績一位になれるのは一人だけ。心理学では、中学校後半から高校時代は「主観の時代」と呼ばれ、自分の世界しか見えず客観的に判断することができない時期になる。まさにその通

り。絶望の日々。梅雨の頃、風邪の高熱のために三回続けて数学の授業を休み、数学がわからなくなった。定期試験の数学で五十点以下を取るのには信じられないことであった。

中学二年の春に、ラブレターをもらって始まった初恋。心から信じ愛し合う人との美的実存の日々。恋愛による人生の高揚感。だが中学三年生の秋以降は高校受験勉強のためにいったん離れて、春まで下級生の人につきあった。同じ高校に入学して初恋の人に帰ると、すでに上級生の方と付き合っていた。「黒川君からことわって」と言われたが、劣等感に悩む自分が都会的上級生に何も言うことが出来ない。初恋は美しい思い出を残して無残に終わった。一年間書き綴った交換ノートは炎の中に消えて行った。裏切り、裏切られた。私が悪かったのだが、分らなかった。——去年まではあれほど愛し合っていた人が、今は別の人と仲睦まじくしている。同じ人なのか。人が信じられなくなった。信じられるのは自分しかない。尊敬できるのは自分だ。だが自分は劣等感の真つただ中心から話せる親友も他の高校に行き、孤独のなかで私は光を求めて呻吟した。

劣等感と人間不信と孤独——明るい

世界から、突然、暗くて深い淵に。人生の暗黒期。生きる意味と目標を、そして愛し信じられる人を、必死に探し求めた——

苦手な数学の勉強をするために放課後から夜にかけて高校近くの県立図書館で過ごした。面白くもない数学。これを学んで生きる意味が分かるのか。いつしか数学よりも図書館にある伝記や思想の著書を読むようになった。ガンジー、ケネディ、ベルグソン、シュバイツァー、西田幾多郎の生涯と思想に光を求めた。また高松市民大学講座や仏教講演会にも出て求道した。仏教徒の岡潔教授が言うように、すべては無常なのか。シュバイツァーの生き方には感動したが、変わらぬ暗い日が続いた。本当に信じ愛し合える人も求めた。だが見つからなかった。いつしか思い出となるべき修学旅行も空しく終わり、二年生の秋になっていた。

初めての祈り

秋晴れの日曜日であった。高松高校



二年生である私は、その日も習慣どおりに高校の自分のクラスで朝九時から勉強をしていた。四階の幾分広いク

ラスでただ一人で勉強していたわけだが、なぜか頭に入らない。英単語もいつものようには覚えられない。気分転換しようと、私は屋上に出た。気が遠くなるような青空がそこにはあった。クラスの半分程の広さの屋上には、砕け散った牛乳瓶のガラスがあった。級長にならないように、自ら志願した生活委員であったために、私にはガラスを片付ける義務があった。教室から、ほうきとちりとりを持ってきて、ガラスのかけらを集めた。私はこの義務にうんざりしていた。その時、思った。「人のために働くには、自分の力だけでは限界がある。何か大きな思想がなくては、無理である」こう考えてきた時に昨日のラルフ・カックス宣教師の言葉が心に浮かんだ。「明日礼拝ニオイデマセンカ。ゼヒオイデクダサイ」——私は十一月になつて高松市内にある高松クリスチャンセンターに、毎土曜日に通っていた。それは高校生が集会があるためであり、私が行くようになった動機は、キリスト教の否定であった。実は、その年の夏休みに西田幾多郎著『善の研究』の内容をノートに克明に分析していた。実在の真相である「純粹経験」は個人にも万人にもあてはまる経験である。それなら天使や悪魔とかの荒唐無稽な存在を信

じるキリスト教はアホな宗教だ、簡単に否定できると思った。高校に入つて絶望の日々。そうだ、今、キリスト教を否定すれば、高校時代の良い思い出になるだろう。自信を持って宣教師との議論が開始された。神の存在、創造論、西欧中世、キリスト教国の米国によるベトナム戦争、復活の事実、聖書の預言等について、土曜日はいつも三時間近く宣教師と議論した。だが私の反論に対して宣教師は時間をかけて丁寧に答えた。それは納得できるものであった。私の反論は、ついに底をついてきた。「神は存在し、イエスの復活はあったかもしれない。聖書は信頼できるものかもしれない。だが信じようとは思わない」というのが対談の結論であった。尊敬する人物はシュバイツァー。三十歳までは学問と芸術のために生き、それ以後は直接人々のために生きる生涯。シュバイツァーの人生に従いたい。そこでシュバイツァーの『自己伝』を読みなおした。すると、彼はクリスチャンであり牧師でもあり、聖書の言葉に従って人生を歩み、アフリカでは医者であり宣教師でもあった事実を知った。「クリスチャンになるかもし



れない」不吉な予感がした。

「ヨカッタラ夕食ワイツシヨニシマセンカ」質問することがなくなった昨日の土曜日、宣教師の家に初めて行き夕食を共にした。明るい雰囲気の中で私だけが暗く、別の人間のようにであった。問題は自分にあるのでは。夫人が、娘に私を紹介した時の“*He is not yet a Christian*.”の言葉が心に残った――

「是非礼拝二、オイデクダサイ」

秋の淡い日光は青空から降り注いでいた。静かな屋上で唯一人腰をおろして遠くの方山々や建物を眺めていた。不意に私は祈る衝動にかられた。「私には神がいるかどうかわからない。だが、もし神がいるのなら、証拠を見せてくれ」そのように念じて祈り目を開くと、一メートル程先にいた二、三羽の雀が驚いて飛び去った。その方角は教会のある方角であった。時計を見ると十一時十分前。教会までは歩いて十分。礼拝は十一時から。その時私には、雀が「礼拝に行こう」と誘っているように思えた。

私は立ち上がってクラスに戻りバッグを持って教会に向かった。誰かに導かれるように。

初めての礼拝

宣教師は笑顔で私を迎えてくれた。

知らない信者を避けて、最前列真ん中のいすに座った。祈り、賛美歌を歌った後、一人の女性が、いかにして救いに至ったのかを説明した。救いを体験していない私にとって話す内容には半信半疑であったが、彼女の目は嘘をついていないと感じた。

再び賛美歌を歌って説教が始まった。宣教師はたどたどしいが、はっきりとした口調で喋りだした。

「聖書ノ教エノ中心ハ、神ヲ愛シテ、次ニ人ヲ愛スルトコロニアリマス。」

『こころを尽くし、思いを尽くし、知力を尽くしてあなたの神である主を愛せよ』ト聖書ハ述ベテイマス」この教えについては以前の宣教師との対談で知っていた。しかし改めて聞くと、この教えは、人間が作ったものでなくて、人間を越えたあるものが作ったのではないかと感じた。

「シカシ、人間ハ神ヲ愛サズ、人ヲ愛サズ、自分ダケヲ愛シテイマス」

私はその通りの人間であった。学校においては勉強のできる誠実な人というレッテルをはられて、小学時代から模範生であった。だが、一皮向けば、自分の成績や評判しか考えていないエゴイストであった。

「全テノ人ハ罪人デス。罪ガアルタメニ、本当ノ喜ビガナイ。祝福ガナイ」

私はその時初めて、自分が罪人であることを悟った。人を信じる事が出来ず、今まで自分を信じて、自分の力に全てをかけていた。だが、その自分は結局は、罪で汚れた人間に過ぎない。その通りだ。過去自分が犯してきた罪――両親がいなかったときにこっそりお金を盗んだこと、マーケットで万引きしたこと、中学生になってから、優等生の名に隠れて、私に尽くした初恋の人の名に隠れて、私に尽くした初恋の人を含む二人の女性を傷つけたこと、高校生になって両親にいつも怒っていたこと――それらがまざまざと頭に浮かんできた。今まで肩をはって信じてきた自分は、罪のためにどうしようもない存在であることを、痛いほど感じた。

「神ハ、シカシ人間ヲ愛シテイマス。神ハ、キリスト」ノ十字架デ人間ノ罪ヲ帳消シニシマシタ。キリストヲ信ズル者ハ救ワレルノデス」

これまで何とかして否定しようとしていた神が、今ここにいて、私を愛して、私を罪から救おうとしている。そのことを知った時、私の目から涙があふれてきた。罪を悔いる涙、本当に愛するものを見つけた涙、愛を知らなかった私が神から愛されていることを知った涙、私は一人背を丸めて後ろの者に涙を見せまいとした。だが涙

はとどまることを知らなかった。

説教が終わったことも知らず、いつしか聖歌を皆が歌っていた。

「おかにたてるあけずりの十字架にかかりて 救い主はひとのためにすてませりのちを 十字架にイエスキミ われをあがないたもう 十字架のなやみは わが罪のためなり」歌詞の意味が涙をもって理解できた。

礼拝は終わり話し声が聞こえてきたが、私はなおも泣きじやくっていた。ややあつて宣教師が私の横に座りハンカチを出したので、私はそれで涙をぬぐった。

「黒川さん、生マレタテノ赤チャンハ、マズ何ヲシマスカ？」

生れた赤ちゃんは泣く――そうだ自分は今、生まれたのだ、新しく。それがわかると、ふたたび涙が込み上げてきた。

涙が出尽くした時、眼には別世界が映じた。暗やみから光輝く世界。私は信じたいことを言って、宣教師の言うままに、罪の悔い改めと、神を信じる決心の祈りをした。

私は旧約聖書物語を借りて、教会の外に出た。青空がまぶしかった。日光が私の全てに祝福を与えた。帰りの電車から見る屋島と瀬戸内海が輝いて

いる。すべては神様が創造したのだ。私は喜びと自由を感じた。

家に帰り



夜の十一時
ごろまで、旧
約聖書物語
三巻と四福
音書と使徒
行伝、第一コ
リント書あ
たりまでを
読みふけつ
た。信じる前

には分からなかった聖書の言葉が、今はすんなりと理解できる。聖書は本当に神によって書かれた書物だ。救われた喜びがあふれ出た。そして眠りにつ

いた。
私の人生において、この日は大転換の日、新しい誕生日である。

一九七二年七月一六日に洗礼を受けた。

礼証明書

洗礼式

「だれでもキリストのうちにあらなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よすべてが新しくなりました」

Ⅱ コリント五章十七節

神の恵みに生かされて

米田昭三郎

全国的、世界的にコロナウイルスにより、行動や発言を自粛し、教会の礼拝や福音宣教が制約され苦しみ悩む日々であります。この時こそ、私達主イエスキリストに贖われ救いに与っているキリスト者として、家族、友人、知人と共に真剣に神に祈りをささげる日々でありたく願います。コロナウイルス病原菌を取り去っていたために、すべてのキリスト者が主の御前にひれ伏し心を合わせ祈ることの大切さを思わしめられます。祈りは応えられるとの確信をもって。

私は大阪でクリスチャン両親の元、一九三五年誕生し85歳を迎えさせていただきました。牧師に命名され御言葉ヨシユア記1章5〜9節をいただきました。工場経営をしていた父は技術将校として戦地に行き、母は7人の子供をかかえ、工場の管理とともに大変な苦勞をし、私は学童疎開で家族から離れての生活、2年後奈良県に疎開している家族に合流。幸い、父も無事、復員し隣の商店街の一軒を購入

し家族一同移転。

その商店街にどこで聞かれたのか宣教師と通訳の方が訪ねてこられ、この地で1ヶ月のキリスト教伝道集会をしたとのこと、両親は大喜びで積極的協力。商店街関係者からは商売稼ぎ時の土曜日、日曜日を閉店するについて苦情もありましたが伝道に協力。

高校生の時、その奈良県吉野郡大淀町に賀川豊彦先生が来られ農業会館を借りて伝道集会。小柄な先生で健康的に黒板と白墨は使用しないとのこと、当時は墨汁が売られていない時であり、私は友人の高校生とともに両手に硯石をおいて擦り、小型バケツに沢山擦りました。大きなハトロン紙に筆で講演内容を書かれました。賀川先生と言うと私にとってこれが大きな思い出です。それにしても、教会員の殆んどいない地方都市に足を運ばれ福音宣教をなされた先生のお働きに敬服するばかりです。

個人としての主に在る恵みの証しは沢山あり、イエスの友会の働きが今後とも神様の導きのもと継続され賀川先生の宣教精神を学び続けたいものです。また、主にある喜びを分かち合っていきたいものです。

共に歩んだ喜び

長谷川進一郎

私は、山陰地方の鳥取県の西にある米子市で生まれました。美しい砂浜と日本海があり、雪の大山は「出雲富士」と呼ばれ、家から見えました。

父は、国鉄に勤務していましたが、キリスト者として熱心に教会生活をしていました。国鉄労働組合の委員でしたが、大阪の委員長になり、西宮にある国鉄宿舎に住むようになりました。私の小学校5年生の時です。私たちは、西宮一教会に出席するようになりました。この教会では、正月には3日間、「イエスの友会」の関西冬期福音学校が開かれており、私は父と出席し、賀川先生に出会いました。毎年出席するようになり、会場整備と受付の仕事を手伝うようになりました。建物の2階には宿泊できる部屋があり、全国各地から大勢の参加者がありました。宿泊の為の布団の出し入れ、掃除などは私の仕事でした。賀川先生は、敷地内にある家に宿泊されておりました。私が関西学院大学の神学部に入学する決心をし、伝えに行きました時、

会牧師と幼稚園長（16年）、はりま
平安教会牧師（3年）を最後に隠退い

◎会費(三千元)七名(広崎仁一、網谷

場所…ときリゾート箱根別邸 神奈川
県足柄下郡箱根町元箱根字大芝10

事務局 高島史弘

070.4091.4173 攜帶